

令和6年度 一般選抜（後期）

小 論 文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 試験開始の合図があった後、最初に問題用紙と解答用紙の確認を行ってください。**問題用紙は A4 版片面 1 枚（表紙は除く）で、解答用紙は A3 版片面 1 枚**です。枚数の不足、重複のないことを確認してください。
また、印刷が不鮮明な場合は、手を挙げて試験監督員に知らせてください。
3. 受験番号の記入漏れ又は誤記があった場合は失格になります。
4. 解答は、解答用紙に、**横書き**で記入してください。
5. 下書きは、別紙の下書き用紙を使用してください。
6. 数字 2 文字以上を続けて記入する場合は、次のように記入してください。

例① 2 0 2 4 年

→

2 0	2 4	年
-----	-----	---

例② 9 9 . 9 %

→

9 9	. 9	%
-----	-----	---

7. 濁音（が、ぎ、ぐ・・・）、半濁音（ぱ、ぴ、ぷ・・・）は 1 文字として記入してください。
8. 体調不良やトイレに行きたい場合などは、黙って、手を上げてください。
それ以外の途中退室は認めません。
9. 試験監督員の試験終了の合図と同時に解答するのをやめて、着席したまま試験監督員の指示を待ってください。
10. 解答用紙は、未記入のものも含めすべて回収します。なお、問題用紙及び下書き用紙は、持ち帰って構いません。

令和6年度 一般選抜（後期）小論文試験問題

【問】

「聴く」というのはどのようなことであるか、課題文の内容を要約した上で、あなたの考えを800字以内で論じなさい。

【課題文】

聴くということがだれかの言葉を受けとめることであるとするならば、聴くというのは待つことである。話す側からすればそれは、何を言っても受け容れてもらえる、留保をつけずに言葉を受けとめてくれる、そういう、じぶんがそのままで受け容れてもらえるという感触のことである。とすれば、＜聴く＞とは、どういうかたちで言葉がこぼれ落ちてくるのか予測不可能なく他への訪れを待つということであろう。

なぜ言葉を迎えるにゆくのが＜聴く＞ことの最悪のかたちになるのかといえば、語るということがみずから距離をとることだからである。苦しいときに、ひとはだれかに語ることでその苦しみを分かち持つてほしいと願うが、しかしその苦しみはもっとも語りにくいものである。苦しければ苦しいほど語りはむずかしい。理由は何重にもなっている。まず、苦しいときにはそもそもそれを他人には語らないものである。苦しいことはなによりも忘れたいことであり、語ることでそれをわざわざ思い出すことはない。苦しいことはまた、本人以外にはなかなか判りづらいものである。だからそれを言葉にしようとしても、一言口にするたびに、こんな言葉ではきっと伝わるまい、こんな軽い言葉ではとうてい言い尽くせない……というふうに、言葉の感触を一つ一つ確かめながらでなければ口にできない。断片的にでなければ、どもりながらでなければ、語りだせないのである。さらに、苦しいことが苦しいのは、解決に途（みち）が見えないからである。いや、そもそもそこには答えはない。なぜあのひとではなくて、このわたしばかりが苦しまなければならないんだろう……という問いに、いったいだれが答えられるだろう。だから、苦しみの語りは訥々（とつとつ）としたものとならざるをえない。すらすら口にできるものではないのである。

が、それでもひとは聴かなければならない。言葉が訥々（とつとつ）としかこぼれ落ちないにしても、長い沈黙があいだに挟まるとしても、それでもひとは聴かなければならない。なぜか。苦しむひとがみずからのその鬱（ふさ）ぎについて語るというのは、その鬱（ふさ）ぎを整序し、それから距離をとるということだからだ。語ることで、その鬱（ふさ）ぎとの関係そのものが少しずつ変わってゆく。溺（おぼ）れたままでは語れないのである。とすれば、この溺（おぼ）れから脱すること、そのプロセスをたどりきることが苦しみについての語りの要（かなめ）だということになる。

【出典】

鷲田清一、「待つ」ということ、KADOKAWA、2006年、p69-71.